

歴史を伝えるということ 田中拓也

令和四年十二月十二日、篠弘氏が亡くなられた。享年八十九歳。氏の『現代短歌史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（短歌研究社）は私が短歌を作り始めた平成の初め頃に短歌史を把握するうえで必読書であった。同書を読まずに短歌史に関する発言をすることは躊躇されたし、何かわからないことがあれば同書を通して学ぶことが度々あったことをよく覚えている。篠氏の最大の業績は幅広い視点で現代短歌史を提示した点にある。独自の視点で現代短歌史を描き出すことは大変な労力のいる仕事であつたと思う。その基礎研究の上に現代短歌があることを忘れてはならない。

今、現代短歌史を広い視野を持って語れる人はどれだけいるだろうか。振り返ってみて竹柏会「心の花」の歴史について改めて考えてみたい。私が入会した頃に新入会員に贈られていた『心の花 小史 心の花の歌人と作品』（竹柏会）という小冊子がある。五十ページに満たない小冊子であるが、明治三十一年の創刊から昭和四十年代後半までの誌面の変遷と創刊以来の主な歌人についてまとめたものである。執筆は佐佐木由幾、佐佐木幸綱、石川一成、伊藤嘉夫の四名。なかでも石川一成が執筆している佐佐木信綱をはじめとする十八名の歌人を紹介した「心の花」の歌人は同冊子の中核をなしており、貴重な資料となつていい

る。このような積み重ねが短歌史の構築の一助となることは言うまでもないと思う。

「歴史」とは意志をもって伝えるべきものでなければならない。それは短歌史に限らないことと思う。そんなことを考えている時に一人の高校生が書いた小説が心にとまつた。第三十七回全国高等学校文芸コンクール小説部門で最優秀賞を受賞した「鷺寿司」である。

「鷺の寿司が食べたい」

祖父は澄んだ瞳でこちらを見つめてそう言つた。

（横山晴香「鷺寿司」より）

病床の祖父の一言をきっかけに「俺」は東日本大震災の津波によつて失われた故郷の記憶を辿る旅へと発ち、やがて「鷺寿司」の正体を知るというストーリーである。仙台在住の作者が書いた同作はコンクールの審査会でも話題となり、注目を集めた。しかし、実は作者は震災発生時に関東在住であり、東北で被災はないといないうことが「受賞の言葉」を通してわかつたが、私が改めて注目したのは次の一節である。

伝えたいことがあります。時は流れしていくということです。「知る世代」の語る言葉は勿論重要です。しかし、「知らない世代」の語る言葉も重要なになってくると思います。

（「受賞の言葉」より）

同様の言葉は様々な場で見かけることがあるが、私は東日本大震災という事実に向き合い、それを創作作品として昇華した作者の行為に胸を打たれた。流れいく時間の中で様々な記憶を伝えることは我々の責務の一つと言えるだろう。